

食から広がるMY WORLD

所属	岐阜県揖斐郡大野町立東小学校	実践者	白木 純子
対象	小学校4年生(46人)	時間数	12時間
場所	教室・ランチルーム	実践教科	総合的な学習の時間
ねらい	テーマ【貧困】 ・世界には、様々な食があることを知る。 ・食は生命と関わっていることに気付く。 ・自分の食生活を見直す。		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	◆身近な水について知ろう ・自分たちが一日に使う水の量はどのくらいだろう。 ・水は何にどのくらい使っているのだろう。	社会科「くらしをささえる水」でも学習済み
	2	◆世界の水事情① ・水クイズ～いろいろな言葉で水を言ってみよう～ ・水から連想できる言葉 ・国あてクイズ～水が使われている各国のことわざを知る～	テキスト 「水から広がる学び」
	3-4	◆世界の水事情② ・地球上に占める水の割合とその中で生活に利用できる水の割合を知る ・資料から、どこの国が1人あたりの水の使用量が多いのかを探す ・エチオピアの少女「タムリさんの一日」を想像し、写真を並びかえる	・コロ ・エチオピアの料理の写真
	5	◆「先生、エチオピアへ行く」～エチオピアの水&食について知ろう～ ・エチオピアの地域の水事情を紹介する ・JICAの支援で作った井戸の仕組み ・その他「エチオピアの子ども達の一日」	・井戸や水汲みをしている少女の写真 ・エチオピアで汲んできた水を紹介
	6-7	◆世界の様々な食を見てみよう ・「世界の食卓」の資料を使って、各国一週間分の食事の種類と量を知ろう。 ・なりきり家族で発表	・資料 「世界の食卓」
	8	◆食と生命との関わりについて知ろう ・もしも、大地震が起き、食糧が足りなくなったら・・・	食料自給率表
	9	◆日本と世界との食のつながりについて ・夕飯の献立を立てよう！～食料自給率表をみて～	地球データマップ 「飢える国・飽食の国」
	10	◆食が満足に得られない人々 ・【フォトランゲージ】で原因を想像。地球データマップ	
	11-13	◆自分たちができることはどんなこと?!～伝えていこう、食問題～ ・グループごとに、まとめて発表する	授業参観で保護者へ発表する
	成果	日本以外の世界の国に目を向けるきっかけとなった。エチオピアを紹介するに当たり、食に絞ったことで、日本と世界とのつながりを知るだけでなく、子どもたちは改めて自分の食生活を見直すことができた。	
課題	子どもたちが知っている世界の情報が少ないため、こちらから資料を提示することが多く、結果、教師の想定内のまとめになってしまったこと。		
備考	自分たちが知ったことを最後の授業参観で親の前で発表する活動では、張り切って準備をしていた。学んだことを一生懸命伝えようと言う姿が、やってよかったというやりがいを感じた。		

[授業実践の詳細]

1 時限目「身近な水について知ろう」

この時限のねらい

- ・蛇口から1分間でどのぐらいの水が出るのか知る。
- ・普段の暮らしの中で、何にどのぐらいの水を使用しているかを知り、自分の生活を見直す。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 1日の生活を思い出しながら、いつ、何のために水を使ったか、いくつかあげてもらおう。
- ② 水道の水を1分間出しっぱなしにすると、どのぐらいの水が流れるか調べる。
- ③ 実際に1日に使っているかを調べ、ワークシートに記入する。
- ④ 気付いたことをワークシートに書く。



<1分間の水の量を調べる>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 子ども達は「1分間にどのぐらいの水が出るのか想像できなかったけど、予想を超えてこんなにも大量に流れることを知ってびっくりした。」
- ◇ 「1日にこんなに水を使っていると思わなかった。」「手を洗う時も、水を勢いよく出すのではなく、少しずつ出そうなどと水を無駄遣いしないようにしようという感想が多かった。」

3 使用した教材

<教材1> 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会「暮らしの中の水」

2 時限目「世界の水事情① ～水とわたしたち～」

この時限のねらい

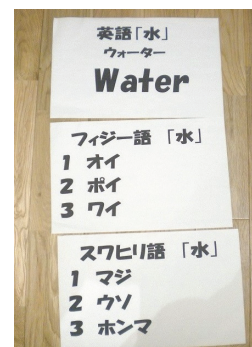
- ・「水」を通じて、世界には様々な生活があることに気付く。
- ・世界地図や地球儀を用いて、世界の中の日本の位置を確認する。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイク～水クイズ「いろんな言葉で「水」を言ってみよう～
- ② 「水」から思い浮かぶ言葉を探してみよう。
- ③ 世界にある「水」に関係することわざを世界地図で場所を確認しながらつなげる。

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「カンボジアは水(川)の流れで、船に乗って食べ物やフルーツを売りに行く生活なんだということが分かった。」「井戸は日本だけだと思っていたけれど、イギリスにもあることを知った」など、水を通じて日本とは違う生活やあるいは井戸を使って生活するという共通点に気が付くことができた。
- ◇ 世界地図や地球儀を初めて使う子ども達にとって、日本からの近い国や



<水を表す言葉>

遠い国など、日本を中心に様々な国の名前や位置を知ることができた。

3 使用した教材

<教材2> 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会
「世界の水の言葉たち」

<教材3> インターネット google 画像検索



<水に関係することわざ>

3-4 時限目「世界の水事情② ～地球上の水の割合～」

この時限のねらい

- ・地球上の水の割合と生活に利用できる水はどのくらいあるのかを知り、日本が水に恵まれた国だということに気付く。
- ・アフリカに住むタムリさんの一日の生活について知ることで、日本の子ども達との違いに気付く。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 宇宙から撮った地球の写真を見せながら、「水の惑星」と呼ばれる地球上には、どのくらい水が占めているのかを想像し、どこにその水があるのかを知る。
- ② その中で、生活に使える水（海は使えない）はどのくらいあるのかを想像する。
- ③ 世界地図を見せて、生活に使える水が多い国と少ない国があることに気が付く。
- ④ 1年の水の使用量が少ない国、「エチオピア」に住む小学5年生「タムリさんの一日」生活の様子を写真並び替えて、想像する。【フォトランゲージ】



<世界の水事情>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「地球上には98%の水があるのにも関わらず、生活に使える水はたったの0.01%しかないことにびっくりした。」「世界では、住む場所によって水をたくさん使っている所と少ししかない所があり、びっくりしました。」
- ◇ 「エチオピアでは、蛇口がなく、子どもが歩いて水を汲みに行くのが仕事だと聞いて、かわいそうだと思います。」「アフリカ大陸の子ども達全員が働いているのかな。子ども達はいつ勉強するのだろう。」
- ◇ 成果:未収得である割合など、子ども達にとって分かりづらかったと思うけれど、円グラフを見せることによって0.01という微量な数を示した。一番効果的だったのは、【フォトランゲージ】でタムリさんの生活を推測したことだ。写真に生えている木や建物から想像して、何をしているところなのかを想像して、グループで話しあったことは、参加型の手法が生きたと感じた。



<写真を並び替える様子>

3 使用した教材

<教材4> 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会
「地球上の水の割合」「タムリさんの一日の写真」

<教材5> JICA地球ひろば『国際理解教育実践資料編』2014年、廣済社

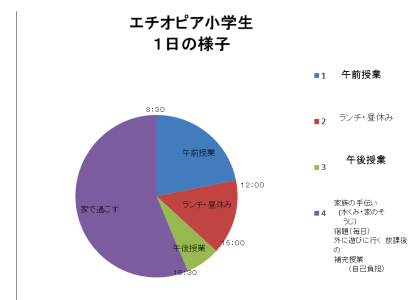
5 時限目「先生、エチオピアへ行く ～エチオピアの水&食、その他～」

この時限のねらい

- ・エチオピアで発見した水事情について知り、水を得るための工夫や努力について考える。
- ・エチオピアの食やその他について興味をもって考えたことを伝え合う。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① エチオピアで汲んできたペットボトル(都市の排水・チャモ湖)の水を見せ、この水の物語を語る。
- ② 地方と都会での水の状況について写真を見せながら、紹介する。
- ③ 日本とのつながりで、JICAが支援した井戸や井戸の仕組みを紹介する。
- ④ 自分たちの一日の様子とエチオピアの子ども達の一日の様子を比べ、相違点を探す。【対比表】



<エチオピアの小学生の一日>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「(靴磨きの男の子たちの話)子どもたちが生活のために働いているのが大変そう」「女の子が水を汲みに来ている。」「ロバに水を運ばせている」「蛇口をひねっても水がでないことや、雨水をためてそれを飲むことにびっくりした」などと、日本と違いすぎたので、いろんな疑問と反応が返ってきた。
- ◇ 2つの国の対比表では、共通点として宿題があることや同じような勉強をしていることがあった。相違点では、帰ったら炊事などの家の手伝いをしていることや、外で遊ぶことが多いということだった。どこの国でも勉強は大切だということが伝わったようだった。エチオピアで取材したことが生かせる場があったことが嬉しかった。

3 使用した教材

- <教材6> 現地で汲んだ水や現地で購入したコロ(食材)
- <教材7> 現地で取った写真・動画
- <教材8> 取材した統計グラフ
- <教材9> 自分たちが書き込む円グラフと対比表



<実際に汲んできた水>

6-7 時限目「世界の様々な食を見てみよう」

この時限のねらい

- ・世界には様々な料理があることを知り、日本は色々な食が揃っていることに気付く。
- ・1家族に対して食事の量が違うことに知り、それについて疑問や関心をもつ。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① アイスブレイク「今日の朝ごはん」で四隅に分かれる。
- ② 給食の献立表から白米やパンがどれだけ食べられているか探す。
- ③ 「なりきり家族」各大陸10か国程度の1週間分の食料が陳列されている食卓写真を取り上げ、1班に1枚自分たち家族と家族の食べるものを他の班に紹介する。【ロールプレイ】
- ④ その国がどこなのかを予想し、黒板に貼る。
- ⑤ 気が付いたことを発表する。



<なりきり家族を実践中>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「日本は米をよく食べるけど、国によっても食べ物や飲み物が違うことが分かった。」「いろんな国の写真を見たり、想像するのが楽しい。」「食べ物が少ない国や多い国がある。」「マリ、チャドは食材が少ないがドイツが多い。」「肌の色と食料の量」の関係を読み取るこもいた。
- ◇ 成果: 子ども達は写真を見て想像するのが楽しく、班の中でも話が弾んだ。いろいろな意見の中で「日本にある物が世界にある」ということに気付いた意見を取り上げ、日本が食料を他国から輸入しているという次々の授業の布石を打てた。

3 使用した教材

- <教材10> 学校給食の献立表
- <教材11> 開発教育協会『世界の食卓』2010年



<世界から食が集まる日本>

8 時限目「食と生命の関わり」

この時限のねらい

- ・食が乏しくなると、自分の体や生活がどのように変わっていくのかを想像し、食について考える。

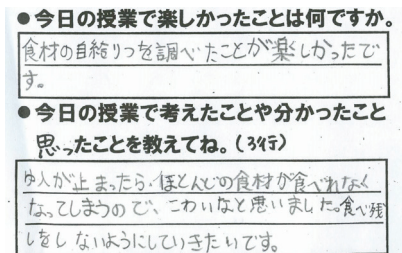
1 児童生徒の活動の流れ

- ① 「もしも、大地震が起こったら・・・」の想定のもと、その後をワークシートに書いていく。【派生図】
- ② 想像してみて、思ったことを共有し合う。

2 児童生徒の活動の成果・反応

<もしも大地震が起こったら・・・>

- ◇ 「もしも、大地震が起こったら・・・」→「町が孤立する」→「栄養不足になる」までは、こちらで状況を固めておいた上で、「体が動かせない」→「友達と遊びに行けない」→「引きこもりになる」→「話せないストレスがある」→「家族が悲しむ」→「死を選ぶ」等と栄養不足がすぐに死に至るという直結した考えではなくて、日々の生活に基づき、思考ができていた。
- ◇ 授業後の振り返りでは、「大地震に備えて非常食を蓄えておこう」や「地震は改めて怖いと思った」など、そちらに感想が流れてしまったため、既習事項を掲示しておけば、子ども達がつながりを感じ、このような結果にならなかったかもと反省する。



<児童の振り返り>

3 使用した教材

- <教材12> ワークシート2枚(派生図と振り返り用)

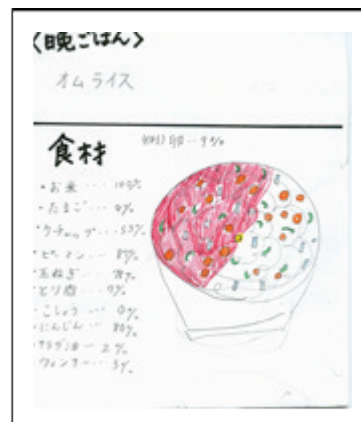
9 時限目「日本と世界との食のつながり」

この時限のねらい

- ・日本は他国から食料を輸入し、食料自給率が低いことを知ることで、「もし輸入が止まってしまったら」どうになってしまうのかを想像する。
- ・他国からの輸入の背景にどんな問題があるのかを考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 好きなお寿司のネタを3つの中から1つ選ぶ。もし、輸入が止まったら、お寿司はどれだけ食べられるか見せる。寿司の写真を切る。(アイスブレイク)
- ② 「もしも、輸入が止まったら・・・、どんな献立ができるだろう」食料自給率表を元に、自分の好きな献立を考え、輸入が止まったら、食材はどれだけ手に入って、どれだけ作れるのかを考えてみる。
- ③ 日本の食料自給率について知り、原因と課題を読み取る。
- ④ 今後どうしていったらよいかを考える。



<自給率を考えて立てた献立>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「例えば、ジャガイモは 66%しか作っていないことを知り、絵にかくとこんなにも少なくなるということが分かった。」「日本以外からたくさんの食材をもらっておきながら、27.7%も残飯にしていることを知り、これから残さず食べていきたい。」「バナナなど自分の好きなものが輸入されなかったら、食べられなくなることが分かった。」「もっと有難く食べなければならぬと思った。」
- ◇ 割合を学んでいない子ども達なので、一つ一つの食材を計算で求め、どのくらい作れるかという具体的な量までは出さなかったが、大体のイメージで輸入が止まったら、食べられるものが少ないということは分かった。また、その背景に残飯が多いことを初めて知りショックだという感想が多かった。

3 使用した教材

<教材13> 食料自給率表 <http://www.foodpanic.com/index2.html>

<教材14> JICA地球ひろば『世界の食料』2009年

<食料自給率表>

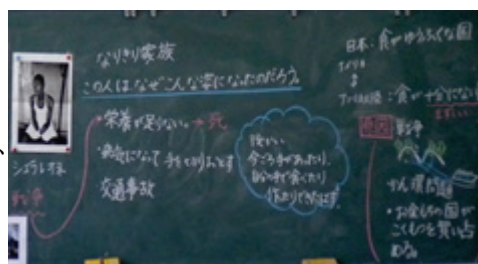
10 時限目「食が満足に得られない人々」

この時限のねらい

- ・食が満足に得られない人々の背景にはどんな問題があるのかを知り、私たちの生活にも気付く。
- ・それらの問題に対して自分たちができることを考える。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 両手を失った男性の写真を見せ、なぜこんな姿になってしまったのかを想像する【フォトランゲージ】
- ② ドキュメント『地球データマップ 飢える国・飽食の国』を見て、説明を加える。
- ③ 班ごとに自分たちができることをまとめる。



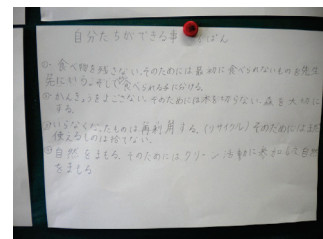
<どうして食が満足に得られないのか>

2 児童生徒の活動の成果・反応

- ◇ 「戦争で手足を切断されたり、子ども達が栄養が亡くなるのはかわいそうだと思う。」「なぜ同じ人間なのにこんなにも人の姿や食が違うのか疑問に思った。」

<自分たちができること>

「川や森を大切にする」「食べ残しをしない」「他の国ばかりたよらない」
 「できるだけ自分の国で取れたものを食べる(地元食材)」「なるべく日本の食べ物を選んで買う」



<自分たちができること>

3 使用した教材

<教材15> ドキュメント『地球データマップ 飢える国・飽食の国』2007年、NHK

<教材16> ワークシート

11-13 時限目「伝えていこう、食の問題」**この時限のねらい**

- ・東小学校の給食における残飯の様子を調べ、全校に伝え食の現状や課題を知らせる。
- ・家族の人に、学んだことを伝え家庭でできることを話し合う。

1 児童生徒の活動の流れ

- ① 給食後に各クラスの残飯調査をし、現状の様子を探る。
- ② 班ごとに学んできたことの発表の準備を進め、年度末の授業参観で伝える。

<残飯調べ>

**全体を通して****1 授業の様子**

海外研修で学んできたことを素材に大きなテーマ「食の格差」について取り組んできた。授業を進めていく中で、改めて自分が何を伝えたいのかがはっきりしてくることがあったり、資料を作っていく中で、初めて知ったことも多かった。世界への関心が薄い小学4年生にとって、世界との初めての出会いを肯定的に受け止めてもらえたらいいなと思いつつも、やはり「かわいそう」につながってしまうことが多かった。すべてを理解するのは難しいと思いつつも、今回の授業で何か心にひっかかってくると嬉しいなと思いつつ、食の現状を考えさせる切り口は沢山あるので、またいろいろな方法で試してみたいと思った。また、参加型の手法を使うことで、考える力やまとめて発表する力がついてくることが分かったので、他教科でも生かしていけたらいいなと感じた。

2 参考文献・資料

- 1) 阿部秀樹『水から広がる学び』2014年、開発教育協会
- 2) JICA地球ひろば『国際理解教育実践資料編』2014年、廣済社
- 3) 開発教育協会『世界の食卓』2010年
- 4) 食料自給率表 <http://www.foodpanic.com/index2.html>
- 5) JICA地球ひろば『世界の食料』2009年
- 6) ドキュメント『地球データマップ 飢える国・飽食の国』2007年、NHK